

**Citation:** Jaaback K, Johnson N. Intraperitoneal chemotherapy for the initial management of primary epithelial ovarian cancer. *Cochrane Database of Systematic Reviews* 2006, Issue 1. Art. No.: CD005340. DOI: 10.1002/14651858.CD005340.pub2.

**CRG名:** Gynaecological Cancer

## [最新版\(英語版\)はこちら](#)

**英語版最終改訂年月:** 22 February 2007

**Clib issue No.;** N/U: 2009 issue 2, -

**背景:** 卵巣癌は化学療法に感受性があり、その生育過程の多くは腹膜腔の表面に局限している。これらの特徴から卵巣癌は腹腔内化学療法の確かなターゲットとなっている。卵巣癌に対する化学療法は通常、静脈内に5〜8クールが反復投与される。腹腔内化学療法(IP)は、化学療法薬を腹腔内に直接投与する方法である。これにより、静脈内投与と比較して抗癌作用が高まり、全身への有害作用が軽減すると思われる。

**目的:** 薬物を腹腔内に投与するという化学療法が加わることで、上皮性卵巣癌の一次治療を受けた女性の全生存期間、無増悪生存期間、生活の質(QOL)、毒性に影響を及ぼすかどうかを明らかにする。

**検索戦略:** Cochrane Central Register of Controlled Trials(CENTRAL)、MEDLINE(1951年〜2005年3月16日)、EMBASE(1974年〜2005年3月16日)、Gynaecological Cancer Review Group Specialised Registerを検索した。2007年2月に検索を更新した。産婦人科腫瘍学に関する主要な雑誌のハンドサーチとカスケード検索も行った。

**選択基準:** 本解析は、FIGOの病期にかかわらず、原発性上皮性卵巣癌と新規に診断された女性を初回腫瘍縮小手術後に評価しているランダム化比較試験(RCT)に限定した。標準的静脈内化学療法を、腹腔内投与の要素を含む化学療法と比較した。

**データ収集と分析:** 2名のレビューアが独自にデータを抽出した。全生存期間、無病生存期間、有害事象およびQOLに関するデータを取得し、さらに無イベント期間の変数についてはハザード比(HR)を用いて、二値アウトカムについては相対リスク(RR)を用いてアウトカムのメタアナリシスを行った。

**主な結果:** 8件のランダム化試験で、卵巣癌の一次治療を受けた女性1819例が検討された。IPによる化学療法レジメンで治療された女性では死亡例が少ない傾向であった(HR=0.80、95%信頼区間(CI)0.71〜0.90)。また無増悪生存期間も有意に延長した(HR=0.79、95%CI: 0.69〜0.90)。IPは消化器系への影響、疼痛、発熱の点で毒性が重篤であると思われるが、静注経路よりも毒性は少ないようである。

**レビューアの結論:** 今回の解析から、IP化学療法の利益が確立された。IP化学療法は、進行性卵巣癌からの全生存期間および無増悪生存期間を延長させる。今回のメタアナリシスの結果は生存の点で静注療法に優るIPの相対的な利益に対して最も信頼性のある推定値を提供しており、意思決定のひとつとして使用されるべきである。しかし、個々の女性にとって最も適切な治療を決定する際には、カテーテルに関連した合併症や毒性の可能性を考慮に入れる必要がある。至適用量、投与時期、投与方法のメカニズムは、本メタアナリシスから検討できない。この点については、臨床試験の次のフェーズで検討する必要がある。

(監訳 吉田 雅博)

翻訳公開日: 09年9月15日

ご注意: この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点がありましたら、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは年4回改定版が発行されます。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。

